

# 隕石は何を望む？



「幸運を呼ぶ力」と胡散臭い男と  
男子高校生

東洋クイーン  
@toyo\_queen

## 一 幸運を呼ぶ力

---

### ○川の土手

野島（十八男、主人公）が高校制服でママチャリに乗って自宅に帰ろうとしている。そこに大音響で隕石が落ちて来たところを見る。

野島「うわー！ 何だ？ 隕石？」

野島は隕石が落ちた場所に向かった。河川敷で周囲が丸く凹んでいた。凹みの中心で隕石を探した。隕石は、土の中にめり込んでいるようだ。野島はそこらにあった棒で掘り始める。

野島「（すごいな。普段から宇宙のことを考えてるから、神様がプレゼントしてくれたんだ）」

### ○走っている車の中

三上（二十五男、詐欺師）がスーツ＋ネクタイで車を運転している。そこに大音響がする。

三上「何だ？ あっちか？」

三上は音がした方向に車を走らせた。しばらく進むと、棒で河川敷を掘っている野島を見つけた。

三上「あそこに隕石が落ちたのか？」

三上は車を止め、トランクを開けた。車載工具から土を掘るのに使えそうな工具を持って野島に近づく。

### ○河川敷

野島が棒で河川敷を掘っている。

三上「こんにちは。何を掘ってるの？」

野島「（なんだか、胡散臭い男だな。隕石のことは秘密にした方がいいな）」

野島「面白い物が埋まってないかな、と思って」

三上「これ、使いなよ（工具を渡す）」

野島「ありがとうございます」

野島は掘り進めた。三上は野島が掘っている姿を見ながら回想する。

× × ×

### ○会議室

三上は先輩から『詐欺師のコツ』の講習を受けている。

先輩「大事なことは、『相手の大切な物を感謝されて預かる』。ここが一番難しいんだ。相手が大切と思う物なら紙だって石だって同じことだ」

三上「金にならないとダメじゃないですか？」

先輩「考えが浅いな。千円札を良く見ろ。日本銀行券と書いてある紙だろ。俺たちは日本銀行券を大切な物だと信じているだけなんだ」

× × ×

三上「（あいつが掘っている『大切な』何かを預かって、先輩に見せれば一人前と見てくれるかな……でも、どうやって？）」

野島は隕石を掘り出した。隕石はまだ熱いので地面に置いてさましている。

野島「（あの男は何者なんだろう。この隕石を狙っているのか）」

野島「これ、ありがとうございます（工具を返す）」

三上「その石、どうするの？」

野島「持って帰りますけど、まだ熱いので……」

三上「触っていいかい？ あ、逃げない証拠に車のカギを預かってよ（車のキーを預ける）」

野島「どうぞ」

三上は左手で隕石にそっと触れた。

三上「（そうだ!）」

三上「これは隕石だね。隕石には『幸運を呼ぶ力』があるという話だ。その話が本当かどうか確かめないか？」

野島「どうやって確かめるんですか？」

三上「ここに福引き券がある。これをあげるから隕石を持って、くじをひいてくれないか？」

野島「（この隕石に『幸運を呼ぶ力』があるのか？ ウソっぽい話だ）」

野島は左手で隕石にそっと触れた。

野島「（そうだ!）」

野島「（そんな力はないことを見せて、この男と別れよう。万一、景品が当たったら……景品を渡して帰ってもらえば……）」

野島「当たった景品は、あなたに差し上げます。景品を受取ってくれるという条件なら、福引き券を受取りますが」

三上「……分かったよ。この福引き券は君の物だ。今から抽選会場に行こう」

## ○抽選会場

女性係員が二人、客が数人いるだけなので、すぐにくじ引きの番が回って来た。

三上「（ここでハズレが出たら、話はガセだったってことに……。景品を当てたとしても、景品をもらって終わりか……。石ひとつ預かるのも難しいなあ）」

野島「（この男に借りを作らずに別れればいいんだ。特賞の旅行が当たると面倒だな。まあ、心配することもないか）」

野島「じゃあ、やります。当たるかな」

係員「おめでとうございます！ 特賞のラスベガス、ペア旅行です。こちらに来てお名前と住所を書いてください」

野島「え、名前？ 誰の？」

係員「福引き券の持ち主のお名前です。（三上を見て）こちらの方が持ち主ですか？」

三上「いえ、福引き券は私がプレゼントしました」

係員「（野島を見て）では、あなたのお名前と住所を書いてください」

野島「……はい」「（面倒なことになった。どうすれば、この男に借りを作らずに別れられるんだ？）」

#### ○自転車の置いてある河原に帰る車の中

三上が運転して、野島が助手席に座っている。

野島「景品はあなたに差し上げると言いましたよね」

三上「はい、そう聞きました」

野島「しかし、ペア旅行の一人目は私でなければダメになってしまった」

三上「はい、そうですね」

野島「ペア旅行の二人目をあなたにすることで、景品を差し上げることになりませんか？」

三上「そうなります。それが隕石の望みかもしれませぬね」

野島「隕石の望み？ 私とあなたのペア旅行を隕石が望んでいる？」

三上「そんな気がするんですよ」

野島「（ウソっぽい話だ。とにかく、旅行が終われば、この男とは、さよならだ）」

三上「旅行の日程が決まったら、ここに連絡してください（名刺を渡す）。私の名前は三上です」

野島「分かりました。私は野島です」

#### ○河原

車が自転車のそばに着く。

三上「じゃあ、また」

野島「必ず連絡します」

二人は別れる。

#### ○ラスベガスのカジノ

野島と三上は遊ぶ台を選んでいる。

野島「（三上は隕石に『幸運を呼ぶ力』があると思っているだろうが、偶然だ。のめりこまない程度に遊んで、部屋に戻ろう。三上に借りを作らないことも大事だ）」

三上「（野島は隕石に『幸運を呼ぶ力』があると思い始めただろうが、そんな力はない。欲張らせて、損させて、隕石を預かる代わりに金を貸す……それじゃ『感謝されて預かる』ことにならないか……）」

野島「この台はどうだろう？」

三上「それは五セント台だから、長く遊ぶのに向いてるが……。こっちのードル台なら二十倍稼げる計算になるよ」

野島「よし、ードル台で稼ごう。隕石ちゃん、よろしくたのむよ」

野島「（さっさと使っちゃえ。三上の選んでくれた台だが、まあ借りを作ったことにはならないな）」

野島はしばらくードル台で遊んでいたら、なにやらマークが揃った。しかし、残高が増えるわけでもなく、音が鳴るわけでもない。

野島「（この台、壊れやがったか。残高、返しやがれ……。いや、これでいいんだ。今日はここまでっていうサインだ。帰るか）」

野島「三上さん、この台壊れちゃったみたいだから部屋に帰りますよ」

三上「ん。どうした。こ、これは！ 係員を呼ばないと」

野島「んー。この揃ったやつは、いくらなんですか」

三上「六百サウザンドだから六万……いや、六十万……」

野島「六十万円ですか。がっぽり儲かりましたよ。じゃ、儲かったんで帰りたいんですが」

三上「さて、六十万ドルは、六千六百万円だ。ここで係員が来るまで待つんだ」

野島「（……二回の幸運……。隕石が僕に幸運を呼んだのか？ いや、どっちも三上が運んでくれた幸運にも見える）」

三上「（これでは隕石を預かることは不可能……。ここからどうすれば……）」

係員が来て手続きを行い、三万ドルはすぐ手に入ることになった。

## ○ホテルの部屋

野島が机の上の隕石を見ながら考えている。

野島「（二回の幸運……。幸運は隕石が呼んだように見えるが、実際は三上が呼んだのかも知れない。三上が呼んだ幸運なら三上と別れたら幸運が消えるのか……。僕か三上のどっちに幸運があるのかを確かめるには、どうすれば……）」

野島が机の上の隕石を左手でなでる。

野島「（そうだ!）」

## ○翌日の朝、ホテルのコーヒーハウス

野島と三上が朝食を食べている。

野島「きのう、考えたんですけど。幸運は二回とも三上さんがからんでいますよね。福引き券は三上さんにもらった券だし、ジャックポットっていう大当たりは三上さんが選んでくれた台でした」

三上「ん？」

野島「だから、今度は僕の提案で、僕の選んだ宝くじ売り場でメガミリオンズを買います。これで外れたら、二回の幸運は三上さんの力ということになります」

三上「幸運を誰が呼んでいるのかを確かめたい、ということ？」

野島「そうです」

三上「二人が協力して呼んだ幸運かもしれないよ」

野島「.....じゃあ、一から四十六までの番号の中でひとつ決めてください」

三上「なるほど、そうゆう協力か。そうすると、協力したメガミリオンズは誰の物かな？」

野島「.....チケット代を払った人の物かな」

三上「分かった、協力したメガミリオンズのチケット代を払うよ。いくら？」

野島「一ドルです」

三上「はい（野島に一ドルを渡す）」

野島「（これで僕の番号が外れて、三上の番号が当たれば三上の幸運だ。少なくとも、僕の番号が外れることで僕の幸運ではないことに.....）」

## ○ホテルの部屋

野島と三上はメガミリオンズの抽選の様子をテレビで見ている。

野島「三上さんの指定した番号をメガボールにしたやつが、協力したチケット、そうでないのが、僕ひとりの幸運を調べるチケットです」

三上「『幸運を呼ぶ力』は隕石の持ち主に来るとでしょ。持っていない僕の番号はダメなんじゃないかな」

三上「（しまった。これじゃ、ますます隕石を手放さないか。いったいどうやれば隕石を預かれるんだ？）」

野島「（三上の番号が当たれば三上の幸運。僕の番号が当たれば僕の幸運、隕石が幸運を呼んだことに.....）」

三上「あ、もう抽選おわってる。ノーマルボールは.....五つとも合ってる！　メガボールはハズレだ。そっちのメガボールは？」

野島「.....合ってる。ジャックポットってことか？」

三上「テレビでは、ジャックポットが一人出たって.....ジャックポットの当選金は九億ドル...  
...こっちの当選金は二十五万ドルだ」

野島「（これはもう、僕の幸運と考えるしかない……少なくとも三上の幸運ではないな）」

三上「二十五万ドル、ありがとう。この隕石にもあいさつしていいかな？」

野島「どうぞ」

三上は左手で隕石をなでる。

三上「（そうだ!）」

○次話へつづく。作者コメント

シナリオ形式が馴染めない方も多いとは思いますが、自分が声優になったつもりで楽しんで頂きたいです。

漫画家の皆さんはネーム素材として「こんな漫画」にしてみよう...とか、楽しんで頂きたいです。